

平成27年度消防団幹部等海外事情調査に参加しました。

公益財団法人日本消防協会において実施された消防団幹部等海外事情調査（平成27年7月21日から29日）に大阪府から消防団員1名を参加させ費用を助成しました。

今回は6年ぶりに日本から参加した「青少年消防オリンピック」の状況を視察し、選手を応援するために開催地のポーランドを訪れ、その後、ベルギー・ルクセンブルクの各地の消防を調査する行程でした。

以下は、今回大阪から参加した消防団員からの報告です。

「この度は、平成27年度消防団幹部海外消防事情調査団に参加させていただき、消防事情の違いや共通点を体験することができ、大変貴重な経験となりました。また日本消防協会会長をはじめ、全国から参加された消防団幹部・日本消防協会の皆様との交流を深めることができましたこと、厚く御礼申し上げます。

今回は、ポーランド・ベルギー・ルクセンブルグ・ドイツの四カ国を訪問し、各国の消防署三か所を訪問させていただきました。

まず初めに、今回の目玉となる「ヨーロッパ青少年消防オリンピック」へ参戦されました日本青少年選手団の応援です。CTIF(ヨーロッパ各国を中心に組織する国際消防組織)が主催している第20回目を迎えるオリンピックがポーランド共和国オポーレ市で開催され、日本全国(埼玉、東京、徳島、沖縄)から選ばれた二十名(中学校1年生から高校1年生まで)の選手が参加しました。選手は、グラウンドで開催された400m障害物競争リレーや消防障害物競争に各々が真剣に取り組みタイムアタックをされておりました。今回の研修参加者全員がお揃いのTシャツを着て、選手や他の国々の応援団に負けないよう応援団長(日本消防協会常務理事)を筆頭に声を振り絞って、口には笛を、手には団扇を振り精一杯応援させていただきました。

消防障害物競技では、競技の最後に選手の代表が評価表にサインし審判員と握手して競技終了と成る姿を見て、やはり海外だと感じました。また各国の選手と日本の選手達で行われた競技終了後のパーティーでは、阿波踊りを披露し国境を越えた交流ができました。参加した青少年たちも素晴らしい夏休みの思い出ができたのではないかと感じました。この事業は「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に関する法律」に沿い、次世代の消防団員への育成なる素晴らしい事業だと感じました。数年もすれば、この事業に参加された青少年が地元消防団の門を叩いてくれると自負しております。ヨーロッパでは8歳から消防事業の教育が始まり、このオリンピックに出場するのが各国の青少年の夢だと聞きました。

引き続き、オポーレ市消防署へ訪問させていただきポーランドの消防事情と日本の違いを学んで参りました。日本と同じく日中は都心部へ働きに行くため義勇団員不足を感じました。義勇団の優秀な面々は本職になれると聞き日本との違いを感じました。また、火災件数の割には死者数が多いのは驚きました。

空路、フランクフルトを經由しブリュッセルに入りブルージュ消防本部視察に参りました。この消防署では、EU各国の消防と連携した大規模災害での国々の協力や、水素を燃料と

した自動車での事故対応を勉強をされており、日本が作った自動車を筆頭に今までに無い取り組みをなされており、国境を越えた災害時のマニュアル作りをなされておりました。

また、運河や河川救助に向かうパワーボートや、消防職員が使うマスクの検査器具の説明を受け、いかに人命が大切かを学びました。我々消防団では酸素ボンベやマスクを使用する事はありませんが、一度使ったマスクは検査器具を通し、ビニール袋に入れ密閉されておりました。少しでも袋が破損していれば、そのマスクを使わず再検査後の使用とのことでした。またヘルメットとの装着方法も違いマスクとの密閉度も素晴らしい物でした。

車路、ルクセンブルグに入り、ルクセンブルク市消防署の視察に寄せていただきました。この署では、日本と同様の救急車とは別に簡易型の救急車が設置されており、日本との違いを学びました。

ヨーロッパ各国にも義勇団が多数おられ、我々消防団と同じ活動をしておられました。国によっては少額の手当ても有るようですが、ほとんどがボランティアであると聞きました。

また、国の人口規模の割には多岐にわたった車両や、テロ対策の設備車両も配備されておりヨーロッパ各国の先頭に立った消防設備を見学させて頂きました。また、地震の無いヨーロッパは羨ましく感じました。

九日間という短い間でしたが、全国各地の消防団幹部の皆さまとご一緒させて戴き、この研修で得たものを生かし今後の消防団活動の糧とさせていただきます。ありがとうございました。」